

封建制語彙の俗語抒情詩への転用

——「若い領主」(ガウセルム・ファイディット)をめぐって——

瀬戸直彦

トルバドゥールの抒情詩に接していて奇異に思えるのは、封建制の用語が多数あらわれることである。主として恋愛をうたう文学のいとなみに、封土 *onor*・領主 *senhor*・家臣 *ome*・臣従の礼 *omatge*・惣領制 *paratge* といった語彙が用いられる。それも単なる文学的な比喩の域を超えて、ひとつの詩ぜんたいがその種のメタファーで覆われていることがある。いわゆる古典期、12世紀の後半から13世紀初頭にかけてこの現象が多い。男女の恋愛のなかでお互いの間に権力関係が生じるのはいつの時代でも同じことだろう。作者と、その訴えかける相手すなわち貴族の既婚夫人との関係は、その多くが当時の社会的地位の上下を、恋愛の面でも敷き写しにしていたであろうことは理解できる。しかしそれにしても、用語のこの頻出ぶりはやはり尋常ではない。

マルク・ブロックにしたがえば、中世の封建制の語彙には、混成的な面と独創的な面がみられ、前者にはラテン語、ケルト語、ゲルマン語などを語源とする語彙と新しく創出された語彙が混じっている。後者は、*hommage* という語のように、新しい社会のさまざまな必要性にじっさいに応じるものであった⁽¹⁾。してみると俗語の抒情詩にレトリックとして用いられたのも、当時の聴衆の必要性に応じて、これらの語彙が使われたとみることはできるだろう。ここでは、とくにこの種の用語の使用が目立つ、「もし誰か男が 至純の心をもつことにより」で始まるガウセルム・ファイディット(1150年以前-1202以降)の一作品(PC 167, 52; M: no. 41⁽²⁾)を解釈することを通じて、この用法のもつダイナミズムともいべきものを提示してみたい。

I ガウセルム—その研究の現状

古典期の詩人としては、ガウセルム・ファイディットはギラウト・デ・ボルネーユ(約81作品)について現存の作品数が多い。ピレット・カルシュテンスの書誌(PC)では69作品を認定しており、ジャン・ムーザの校訂版では75作品を収録している(ただし10作品は作者指定上問題のあるもの)。それでいてこの詩人については、滑稽なイメージしか浮かばない。のちの『伝記』や『解題』の内容から、肥満体の大食漢の詩人で、同じように太ったジョングルールあがりの細君と暮らし、あちこちで日銭を稼いでは賭博ですっていた姿である。だが作品を読みこんでみると、シャンソン(恋愛詩)だけでなく十字軍歌、獅子心王リチャードへの追悼歌、パルティメン(論争詩)⁽³⁾など多くのジャンルを駆使していることがわかる。オイル語を用いたルフラン付きの作品(*rotrouenge*)や、

ブルターニュ伯がオイル語で、ガウセルムがオック語で各詩節交互に討論を交わすパルティメンなどもあって、多彩で豊饒な詩作を残した詩人の姿が見えてくる。

公文書の史料としては（同名の詩人と同一人物であると仮定して）、1165年の結婚、1198年ころの息子とともに行った領地（畑）のシトー会修道院への売却、1202年に第4回十字軍（1202-1204）への参加、ソリニヤックの過去帳での言及などが確認されるにすぎない。作品の内容、とくにトルナーダから、これまでの研究者の演繹したところによれば、ガウセルムは、リムーザンのユゼルシュの人で、1170年ころより詩作を始めて、初め Saut と Apt の領主 Raimon d'Agout をパトロンとしていた。その時期にラインバウト・ダウレンガと交流があり、その庇護者であるトゥールーズのレモン5世らの知遇を得た。1175年ころよりモンフェラートのボニファッチョ1世、1180年代には Dalphin d'Auvergne、北仏のジェフリー2世（プランタジュネット家・ブルターニュ伯）らのもとに身を寄せ、ベラ3世に輿入れするマルグリット・ド・フランス（早世したヘンリー「若王」の未亡人）に随行してハンガリーに旅行している。1187年ころよりヴァンタドゥール侯夫人 Maria を意中の奥方として詩作し、相手にしてもらえずに別の人について歌ったりするが、1193年（1195-96年という説もある）ころに彼女を歌うことを諦める。その間に第3回十字軍（1189-1192）にも参加したらしい⁽⁴⁾。1199年のリチャード王の死去にさいして追悼歌を作り、1202年から再び十字軍に加わった。その後の消息は不明である⁽⁵⁾。

ガウセルムについての文献は、作品の規模に比して少ない。19世紀以降では、レヌアール（1818）が15篇ほど紹介したあとに、ディーツ（1829）、トプラー（1865）、ロベルト・メイエル（1876）らの研究があるものの、多くは『伝記』と『解題』に依拠した作者と作品の紹介にすぎない。20世紀に入ってヴァインチェンツォ・クレシーニ（1910）がトルヴェールとの関係や十字軍歌に着目し、いくつかの作品のスルスの詳細に分析した。またアドルフ・コルゼンは作品の校訂を雑誌に断片的に発表していた。だが本格的な研究と校訂は1965年のジャン・ムーザを待たなければならなかった。その成果は、612ページに及ぶ大冊となり、全作品の校訂と各作品の解説として結実した。固有名詞索引と簡単な語彙集がついている⁽⁶⁾。ムーザはこのあとにガウセルムの伝記研究を発表する予定にしていたが、これは出版されなかった。われわれがこの詩人の作品の全容に触れることができるのもこの校訂によるのであり、その意義は大きい。しかし、以下の理由で、残念ながら問題の多い仕事と言わざるをえない。

まず全体の書誌がなく、メロディーについての記述も皆無である。作品を並べるのに、トルナーダを重視し、配列にいわば「ご当地ソング優先」主義の姿勢をとったが、何人もの相手に捧げられた場合には齟齬が生じている⁽⁷⁾。校訂の方法については、A写本にある作品（全体の62, 1%）はこれを底本にしたとあるだけで（p. 21）、それ以上は述べていない。ここで検討する作品52（M: no. 41）については、Aが収録しているのでそれを底本にし、Aにない第IV詩節は異文欄を見るとCをもとにしたとある。しかし今回、各写本の読みを校合したところ、何の議論も展開せずに、これらのテク

ストを採っていない詩行があった。注には、作品の歴史的な背景とレトリックにかんするコメントはあるものの、原文解釈の問題点やテキスト設定についての言及がない。さらに、作品61、62の扱いかたの問題。これらはパルティメンであり、ガウセルムの討論相手がいる。相手のPeirolとAlbertetについてすでになされた校訂をムーザはそのまま利用し、とくに後者にかんしては、三尺下がつて師の影を踏まずでもあるまいに、恩師ジャン・ブーティエールによるテキスト、ヴァリアント、フランス語訳をそのまま掲載している (pp. 502-508)。

ムーザの校訂に厳しい書評を加えたJ.-H.マーシャルは、直訳を旨とした (p. 9) というフランス語による解釈に誤りが散見され、またその訳しぶりに自由闊達の度が過ぎること、語彙集 (pp. 603-608) の役にたたないこと、写本伝承への顧慮が見られず、各写本ごとの詩節の配置も明瞭でないこと、底本についてA写本にあればAという方針じたい問題をはらむが、それはそれとしてムーザはAに必ずしも従っていないことなどを指摘している。そして、この校訂を参照する場合は、その情報を最初から疑ってかかる必要のあるのが残念と結んでいる。ガウセルムの校訂には膨大な労力を必要とするから、これを再び試みる研究者は出ないだろうとマーシャルが嘆いてから30数年、トリノ大学のヴァルター・メリガ氏が1999年のウィーンでのコロックで、新たな校訂を準備していると発表した⁽⁸⁾。2007年現在まだ完成していないようだが (ひとりの研究者が一生の間に完成できるかできないかという仕事量だろう)、冷遇されている感のあるこの大詩人について、イタリアの研究者による、より信頼できるテキストが日の目を見たとしたら喜ばしいことである。

II テキスト

以下に示すのは、私なりの、C写本をもとにしたテキストである。試訳と注解を付した。

Gaucelm Faidit, *Si anc nulhs hom, per aver fin coratge* (PC 167, 52)

18mss.: A74a-b, C70d-71a, D31c-d, E13a-b, G27a-d ♪, I37c-d, K25d-26a, M82c-83a, N118c-119b, P14c-d, Q58c-d, R45c-d ♪, T145v-146v, V32r-v, a158-159, f59v; S95-96 (Peirol), X86v-87r ♪ (anonyme). [**base:** C]

fragement et citations: H49b-c (Uc de San Cil(=Circ): str. V); P (vida, str.I); N²5a (v.1).

éditions: Raynouard, *Choix*, t.III, 1818, pp.292-295; Mahn, *Werke*, t.II, 1855, pp.88-89 (texte: Raynouard); Mouzat, *Les poèmes*, 1965, pp. 336-344 (texte en anc.fr. basé sur X à part); Robert Archer et Isabel De Riquer, *Contra las mujeres*, 1998, pp. 118-129 (texte: Mouzat).

mélodie: I.F. De La Cuesta, *Las cançons*, 1979, pp.302-305; Rosenberg-Switten-Le Vot, *Songs of the Troubadours and Trouvères*, 1998, pp.132-134.

métrique: 10'a 10'b 10'a 10'b / 5c 7c 7'd 7c 7'd 7c

ordre des strophes:

Seto	I	II	III	IV	V	VI	VII
CGI*K*MQSTVa	1	2	3	4	5	6	7
ADEP	1	2	3		4	5	6
N	1	2	3	5	4	6	7
R	1	2	3	4	5	6	
f	1	2	3	4	5	6	
X	1	2	3				
H						1	
P (razo)	1						
Mouzat	1	2	3	4	5	6	7

* mss. IK: vv.31-32, 21-22 sont intervertis (les deux premiers vers de la Str.III sont remplacés par les deux premiers vers de la str. IV et *vice versa*).

- I 1 Si anc nulhs hom, per aver fin coratge [70d]
 2 ni per amar leyalmen ses falsura
 3 ni per sufrir franchamen son dampnatge,
 4 ac de sidons nulh'onrad'aventura,
 5 ben degr'eu aver
 6 alcun covinen plazer,
 7 que'l bes e'l mals, quals qu'ieu n'aya,
 8 sai sufrir et ai saber
 9 de far tot quan midons playa,
 10 si que'l cor no'n puesc mover.
- II 11 De ben amar sai segre'l dreg viatge,
 12 si que tant am midons outra mezura
 13 que far en pot tot quan l'es d'agradagge,
 14 qu'ieu no'lh deman, tan tem dir forfaitura,
 15 bayar ni jazer;
 16 pero si sai tan valer
 17 ad ops d'amar, qui qu'en braya,
 18 qu'honrat jorn e plazen ser
 19 e tot don qu'a drut eschaya
 20 sai dezirar e voler.
- III 21 Si tot la'm vuelh, ieu non ai autre gatge,
 22 don ni autrei ni paraula segura;
 23 mas ylh es tan franch'e de belh estagge
 24 que la valors e'l pretz, que s'i atura,
 25 fay en lieys parer
 26 qu'Amors y puesca caber,

27 e lai on es valors gaia
28 deuria merces valer:
29 ve'us tot lo joy que'm n'apaya
30 e'm tolh, qu'ieu no'm dezesper.

IV 31 Mas e que'm val ? Quar non ai vassalatge
32 ni ardimen, que l'aus dir ma rancura;
33 quar ieu tem tan s'onor e son paratge
34 son guay solatz e sa belha faitura
35 qu'aiso 'm fai temer
36 qu'a lieys non puesca caler
37 de mal ni d'afan qu'ieu traya;
38 mas si'm volgues retener,
39 no volgr'esser reys de maya
40 tan / cum ab lieys remaner. [71a]

V 41 Er ai auzit, de savi ses folhatge,
42 quant ora mal celui don non a cura,
43 que ditz que'l do Dieus jove senhoratge;
44 aquest oratz sia tortz o drechura,
45 ai d'amor per ver,
46 e s'ieu l'ai, no'm dei doler
47 quar de pro domna veraya
48 val mai qu'om bel dan esper
49 que tal do d'avol savaya
50 qu'om no deya bo tener.

VI 51 Qu'ieu sai una, qu'es de tan franc coratge
52 qu'anc no gardet honor sotz sa sentura,
53 e'l tortz es sieus, s'ieu en dic vilanatge,
54 quar ses tot gienh et a descobertura
55 fai a totz saber
56 cum punh en se dechazer;
57 e dona qu'ab tans s'asaya,
58 no cugetz que m'alezer,
59 que ja de lieys ben retraya
60 ni vuelh que'm puesqu'eschazer.

VII 61 Na Maria, dona guaya,

- 62 vos non etz d'aital saber,
 63 que re no faitz que desplaya,
 64 ans platz tot e deu plazer.

leçons rejetées de C: 18. que honrat, 46. dei] pot, 58 no / cujetz. no cugetz; que] quieu, 60. que'm] ques

- I 1 もし誰か男〔家臣〕が 至純の心をもつことにより
 2 また偽りなく 忠実に愛することにより
 3 また誠実に おのれのダメージ（損害）を耐えることによって
 4 その奥方〔主人〕より何らかの 誉れあるおぼしめしを得たのならば
 5 私だとして 得て当然だろう
 6 何らかの それにみあった快樂を
 7 よいことも悪いことも 何を私が得ようとも
 8 私は耐えるすべを 知っているからで
 9 わが奥方の気に入ることすべてを 行うことができるからだ
 10 その結果この心を あの人から離すことができないほどである
- II 11 よく愛するために 正しい道を歩むすべを私は知っている
 12 そのためわが奥方を 節度を超えてあまりにも愛することになり
 13 あの方は自分に心地のよいことは やりたい放題なのに
 14 その一方で私は あの人への誓いを破ること〔反逆〕があまりにも怖い
 15 キス〔親睦の接吻〕してくれとか寝てくれとか 頼むことができない
 16 しかしながら 人が何を喚きたてようと
 17 愛のわざにかけては 私には一日の長があるから
 18 誉れある昼間と 快樂の夜を
 19 そしておよそ愛する男に与えられる あらゆる贈り物を
 20 望み欲することが できるのだ
- III 21 あの人を望んではいるものの 私には他の保証〔誓約〕がない
 22 贈り物も恩恵も 確かな約束のことばもない
 23 だがあの方は あまりにも高貴で身分は高く
 24 価値と値打ちが 一身に備わっているから
 25 「愛」が自分のなかに 存在するというのを
 26 おのずから 明らかにさせるほどだ
 27 そして快活な価値の あるところでは
 28 慈悲が力を 発揮するはずだ
 29 これこそまさに私を 満足させて
 30 魅了する喜びそのものであり 私はだから絶望することはない

- IV 31 しかし何が私の助けになるのか 私には騎士の豪胆さも
32 勇敢さもないし この怨嗟をあの人に述べる勇氣もない
33 あの人の 名誉 [知行・封土] と生まれのよさ [家門]
34 快活な話しぶりと美しい容姿を あまりにも恐れているからだ
35 このことが私をして 危惧させるのだ
36 私のなめている 苦痛と辛酸など
37 あの人は齒牙にも かけていないのではないかと
38 だが仮にもしあの方が 私をつなぎとめておこうと望んでくれるなら
39 たとえ「五月祭りの王」になるよりも
40 あの人と一緒にいるほうが はるかに嬉しい
- V 41 狂気をもたない賢人から 私はさきほど聞いた
42 何の興味もない男に 不幸あれかしと願うとき
43 神さまがその人に若い領主を付与されますように と言うものだと
44 このような祈願が 過ちであれ正当であれ
45 私は真実かけて 愛のいくばくかを抱いている
46 そして愛をもっているのだから 悲しむ必要はない
47 なぜなら人は 立派な正しい女性から
48 美しいダメージを 希求するほうが
49 劣った悪い女性から 人がありがたいとはとても思えないような
50 そんな贈り物をもらうよりも 価値があるからである
- VI 51 それも私はひとりの女性を知っているからだ きわめてご立派な心ばえで
52 そのベルトの下で 名誉 [知行] を保ったことのない人だ
53 こんな悪口を私が言うのも 過ちはひとえにその人にある
54 まったく細工もせずに あからさまに
55 すべての人に 知らしめているからだ
56 どれだけ自分が 墮落の道を突き進んでいるかを
57 そしてこれほど 遊んでいる奥方が
58 私を有頂天にしているとか 私がその人について賞賛するとか
59 またここにやって来るのを 望んでいるなどとは
60 ゆめお考えにならないで いただきたい
- VII 61 マリア夫人 快活な奥方よ
62 あなたはそんな知恵の 持ち主ではありません
63 人を不快にさせるようなことは 何もしないからです
64 むしろ誰にも気に入られていて また気に入られるに違いないから

Notes

32. que laus dir CS (qellaus) a (qel auz dir)
 don llaus dir MR (don laus) V (laus) f + Mouzat
 queu aus dir GQ
 queu laus dir IK (llaus)
 collaus dir NT (cilaus)

NT写本の読みを除外すると、*que*, *don*, *qu'eu* という3系統の読みに分かれる (GQのみ代名詞の*l'*がない)。AにないテキストはCを採ると述べているのに、ADEPX写本にないこの詩節のこの詩行で、なぜムーザがマイナーな*don*を選んだのかわからない。解釈は«(...) ni la hardiesse qui me feraient oser lui dire ma souffrance !»で、関係代名詞ととるのだろうが、C写本でいえば、31行の*quar*の繰り返しとして、接続詞で解釈できる。

39. reys de maya CMR (rey) SVa (maia rectifié en inaia) + Mouzat
 reis de blaia GNQf
 reis darmaia IK
 rei debraiho T

「ブライユの王」、「アルマイアの王」それぞれ魅力的な読みではあるが、後者は地名の同定が難しく (cf. Chambers, *Proper Names*, 1971, p. 53)、前者はいずれのブライユであるか詳らかでない。ブライユは、ガウセルムの作品中に少なくとも2箇所に出てくる地名である (PC 167, 12, v.72: *neis qui't donava Blaia!*; 167, 18, v.75)。この第1例と、Aimeric de Beleoniの例 (PC 9, 20, v.74: *Mielhs que qui'm dones Blaya*) とは、ともに「たとえブライユを与えられたとしても」という誇張表現の例で、ここの文脈に合致する。しかしブライユに「王」がいたのかと考えると、意味的に苦しい。5月祭りの「王」という読みは、*maia* がいわゆるメイポール (冬の終わりを告げる5月1日をこたほいで家屋の戸口や広場に木や枝を立てて花々で飾り、ダンスに興じた風習) と関連する。ガウセルムには *calenda maia* という表現が2回見られる (PC 167, 9, v.23; 167, 60, v.2)。そのメロディーで有名な、作者不詳の *A l'entrada del tens clar - eya* で始まる *balada* (PC 461, 2) では、恋をする美しい「女王」*la regina* が登場する。それに嫉妬する役として「王」*lo reis* についても歌われている (v.14)。ここで想起すべきなのは、祭りのさいに特定の人を選んであがめる風習があり、それが男の場合に「王」、女性の場合は「女王」と呼んだという習慣なのではないだろうか (cf. *Le Roman de Flamenca*, éd. Gschwind, vv.3231-3247 et note au v.3235)。

41. Er ai auzit de saui ses folhatge C
 Ieu folatge MV (Eu) a
 Auzit ai dir ab sen et ab follatge AD (ai] har) EGP (et ab] eszap) Q
 al saui ses follage N
 Mas eu aug dir del saui ses follaie IK
 Ieu ai ia uist de saui ses folage S
 Car auzit ai de saui ses folagie T

大きく分けるとふたつの読みの系統がある。詩行前半で「～と言われているのを (聞いたことがある)」という *dir* を入れて、後半を「分別と狂気をもって」とする ADEGPQ の読みと、「私は聞いたことがある」を前半にもってきて、後半を「狂気のない賢人から (について?)」とする CMRSTVaf の読みである。NIK はそれらの折衷

的なテキストである。ムーザのテキストは、同じく折衷とはいっても、前半をA、後半をCからとっている (*Auzit ai dir, de savi ses follatge*)。

42. quant CIKMNRSTVaf
 qom ADEGP +Mouzat
 Qem Q

ADEGP系統の読みによると、*om*とあって一般論(「人は」)となる。CIKMNRSTVaf系統の読みは、主語をどうとるかが問題で、前の詩節から引き継いできた、自分を相手にしてくれない奥方ととるか、あるいは前行の「賢人」であるのだが、これは前者と考えてよい。

46. nom pot doler CV (non) f + Mouzat
 nom desesper AD (nō) EGIKP (non) Q (nō)
 nō pues mouer M
 nom deu doler NS (nō)
 nom dei doler a
 nō puesc me uer R
 [e no deu] ges desplazer T

ムーザはこの行を、CVfに従い、「et, si je l'ai, je ne puis avoir aucun mal;」と解する。*pot*は3sg. ind. prés.であるから、この解釈は難しいのではないか。ADEGIKPQの読みは、「私は絶望しない」となって意味は通るが、30行目と同一脚韻となり許容しがたい。私はCの読みを生かして、ここでは*pot*の代わりに*dever*の1sg.ind.prés.の形を示すa写本の読みを採用しておく。

51. *franc coratge*: この*franc*はふつう、語源的な「自由人の」からくる貴族の資質:「高貴な」「真摯な」「愛想のよい」の意味で用いられる形容詞である (cf. Hollyman, pp.149-150)。文脈から「放縦な」(«illimité, dérégulé» (PL))という特殊な意味にとるべきだろうか。PLの親本であるSW 3, 586a (8) „Unbeschränkt, zügellos“の項を参照すると、その例文における語義は必ずしも明瞭でない (cf. FEW 15/2, 163a „illimité“ (de la libéralité en donnant) Sordel)。しかしムーザは少なくともそうとっているようである («qui a une conduite si libre»)。ガウセルムの別の例で、*bell'es e pros, franch'e de bel usatge* (PC 167, 59, v.51) があるから、ここは皮肉ととったほうがよいのではないか。事実、CGQ以外の写本は、*coratge*の代わりに*usatge*となっている。

III 封建制語彙のダイナミズム

この作品は18もの写本に記されているから、13-15世紀にかけては大いに親しまれたに違いない。メロディーはそのうちの3写本に残されている。しかし近代になって人気はなく、レヌアール以降、校訂はムーザのものしか存在していない。報われない愛だが耐えることが自分ではできて、相手の奥方と別れることができないという常套的な言辭から始まり(第I詩節)、第II詩節は官能的なモチーフと封建制の用語の重なりが目につく。第III詩節では、当時の抒情詩の典型といってよいモチーフ、相手の身分の高さゆえの不安と「愛」や「慈悲」の介入を期待する二律背反が表現される。

第Ⅳ詩節でひき続き、相手の地位の高さと語り手の不安、一縷の希望にしがみつくその決意を語り手が明示する。第Ⅴ詩節にいたって賢者と狂気、立派な女性と劣った女性の比較がくる。この作品の独創的な部分である。そして第Ⅵ詩節で、かつて知っていたという「悪い女性」について、「ベルトの下の名譽を保ったことがない」とかなり露骨な非難が語られる。トルナーダでは、作品を捧げる相手である「マリア夫人」に、あなたはそのような女性ではないでしょう、と2人称で語りかけている。

この第Ⅵ詩節はかなり有名になったらしく、H写本の一部に挿入されたさまざまな貴婦人 *domna* を描写する詩節集では、ウック・デ・サン・シル [ク] 名義でこの部分が記載されている (cf. Gröber, *Die Liedersammlungen*, pp. 647-648)。さらに、のちにこの作品に付された『解題』の作者は、素行の悪い女性というモチーフから、一篇のファブリオーを仕立てあげた。マリア・デ・ヴェントドルンに失恋したガウセルムに、あたらしい恋人が現れた。それはすでに愛人のいるマルガリータ・ダルビュッソンであった。彼女はその相手ユゴと密会するため、ガウセルムの好意を利用する。ロカマドゥールの聖女マリアに願をかけに行くという口実のもとで、ガウセルムのユゼルシュにある家に来るよう愛人に告げて、ガウセルムの不在中その細君の歓迎を受けて二人で泊まる。しかもガウセルムのベッドを使用した。帰宅した詩人はその顛末を知って衝撃を受けた。そして作ったのが、この「悪いシャンソン」 *mala chanso* だというのである⁽⁹⁾。身持ちの悪い婦人に想を得た、まさにファブリオー風の荒唐無稽な筋だが、ガウセルムのこの第Ⅴ-Ⅵ詩節がユニークなものであったという証左とはなるだろう。

封建制語彙の多いことは一読して明らかである。ガウセルムの作品では、ほかに作品37 (M:no.17)、53 (M:no.16) にとくに顕著であるが、何気ない表現にも封建用語が潜んでいることに注意したい。たとえば作品36 (M: no.54) の冒頭、*Mas la bella de cui mi mezeis tenh* 「私の存在が依存しているところの美しい人が」といった言い回しも、自分のこの境遇を、封土として主君であるその奥方に負っているという含意がある⁽¹⁰⁾。

この種の語彙の研究としては、ホリマンがラテン語からの意味の変遷を、中世ラテン語の年代記や俗語の聖者伝、叙事詩、初期のトルバドゥールの例などをもとに、広い視野から1957年にまとめたものが出発点になるだろう。しかしこの研究は文字どおりの鳥瞰にすぎない。各語彙の精査はまだなされていないのが現状である。この作品では1行目の *hom* (家臣) より始まってほとんど各行ごとに (*leyalmen, falsura, franchamen, dampnatge, sidons, ...*)、隠喩としての封建制にかかわる語彙がちりばめられている。とくに重要な用語では、14行目の *forfaitura* (臣従の誓いを破る行為)⁽¹¹⁾、15行目の *bayar* (= *baizar*) (親睦の接吻) (作品53 (M:no.16) には、「彼女が私を封臣としてキスを与えて迎えてくれた日の喜ばしさ」(vv.8-9) といった表現が見られる)⁽¹²⁾、21行目 *gatge* (保証)、31行目の *vassalatge* (家臣 (vassal) であること、騎士の美德、剛勇)⁽¹³⁾ などが挙げられるだろう。

しかしここでとくに問題にしたいのは、第V詩節である。一読して意味が通じるだろうか。ムーザは、前半を、「J'ai ouï dire à un sage sans folie qu'on souhaite du mal à celui dont on n'a cure, et qu'on dit: "Dieu lui donne une piètre seigneurie!"」と解する。そしてこの詩行を「狂気をもたない一賢人からの、奇妙でかなり不明瞭な引用。封建制についての俚諺 (dicton féodal)」と注したうえで、これが詩節の後半、肉体的な充足についての宮廷風の理論の集約、すなわち悪しき女からの肉体的な贈り物よりも、贅沢な苦痛 (*ric don*) のほうがよいという宣言につながるという (42 行目だけなら、*Om hora mal celui don non a cura* という形でこの部分が、Cnyrim の中世オック語文学におけることわざ一覧の 247 番 (p. 31) に記載あり)。

41 - 42 行目の写本によるテキストの異同については notes を参照していただくとして、わからないのは 42 行目の *jove senhoratge* 「若い領主権」(v.43) である。*senhoratge* が比喩的な意味で用いられたことは、「そして私は接吻の権利 [領主権] を得た」*et aic del baizar senhoratje* (Guillem de Berguedan, *Amicx: senher*, v.40, éd. De Riquer. t.2, p. 256) といった例を参照すると理解できる。しかし、COM2などで検索しても、*senhoratge*⁽¹⁴⁾ につく形容詞としては、*franc*, *honrat*, *ric*, *mal*, *rial*, *dreig*, *bel* などで、*jove(n)* は見当たらない。PL (1909 年) は *senhoratge* に «seigneurie, terre seigneuriale; autorité du seigneur, pouvoir, puissance; redevance due au seigneur» の意を列挙しているが、「領主」の意はない。しかし SW7 (1915 年)、583b (2) の項では „Herr, Gebieter“ (領主、主人) の意を、1190 年ころのモンフェランの慣習法 (*Coutumes de Montferrand* § 10) など公文書からの 3 例をもとに加えている (cf. TL9, 345: *seignorage* „Zur Bezeichnung der herrschenden Person(= *seingor*)“; Godef.7 360a «seigneur»)。「若い領主」という意味にとることは可能であろう。しかも、これはガウセルム独自の表現のようである。

考えてみると、この語の派生した SĒNIOR は JŪVĒNIS (> *jove*) と語義矛盾を犯している。がんらい「長老」が家臣制のなかでの長であり、若い者 (VASSI>vassal) はそのもとに集まる仲間、服従する者であった⁽¹⁵⁾。老いた者に若いと形容するのは撞着語法であり、それだからこそ、前行で賢人と狂気が登場するわけである。普通感覚ではありえないことを喝破するのが賢者であり、v.41 の ADEGPQ 写本の読み「理性になかったことか馬鹿げたことであるかはわからないが」もよい読みである。そして v.44 の「この願いが誤りであれ正当であれ」にもよくつながってくる。後半と関連させて、この第V詩節を統一的に解釈してみよう。詩人にとっての「領主」seigneur (cf. v.9: *midons*) は、*pro domna veraya* (v.47) あるいは *[domna] avol savaya* (v.49) である。後者からは *do(n)* (v.49) 「贈り物」がもらえるが、語り手はこれを拒否して、前者からの *bel dan* (v.48) 「美しい損害」を選択する。*don* よりも *dan* (レトリカルな表現に注意) をとるという常識外の選択を強調するためにこそ、対比的に「若い、年老いた領主」という矛盾した表現が使われたと考えたい。

vv.41-43 では、好きでない人に (*celui* v.42) 「悪いもの」*mal* を与えたいときには、ほんらいあり

えない「若い領主」を神が与えますように (*do ← donar*)、と奥方が祈るのが自然だという。他写本の読みで、一般論として主語を「人」ととっても同じことである。44行の重要なつなぎの文句を経て、後半にいたり、愛をその奥方にもつと語り手は宣言する。そこで与えられることを切望するのは、常識外の *bel dan* であった。なぜ、*don* のほうを選ばないのか、なぜならひとりの悪い女性を知っているからだというのが、つぎの第VI詩節の内容である。

ガウセルムが *jove* と *senhoratge* という撞着語法を用いたのは、かつて「知っていた」悪しき女性と、現在言い寄っている相手（マリア夫人）との対比を強調するためだったということになる。この詩節では対照表現が、巧妙にそして複雑に絡み合わされている。賢人と狂気、奥方とその愛していない相手の男（42-43行）、神と人間、「若い」というここではマイナスに働く属性と年齢の高い領主、つなぎの44行における「過ち」*tortz* (cf. v.53) と「正当性」*drechura*、さらに *pro domna* と *domna avol*、かれらの与える *bel dan* と *tal do (...)* *qu'om no deya bo tener* といった対になる要素に注目したい。

IV 「契約」の変更

トルナーダからすればこの作品はマリア夫人への賛歌であり、第VI詩節は、過去の不幸な恋愛体験を、自分がその犠牲になったとは明言していないものの、追憶しているとみてよいだろう。慕う相手を変更するというシャンソンは、*chanson de change* といわれており⁽¹⁶⁾、ムーザによればマリア・デ・ヴェンタドルンを讃えるために付随的に入れられたことになる⁽¹⁷⁾。ガウセルムはこのモチーフを多くあつかった詩人で、作品18, 20, 29, 27 59などがこれに属する。作品20 (M.no.40) などは、全篇が「悪しき女性」*mala domna* への恨みつらみで、トルナーダだけがマリア夫人へのオマージュになっている。また作品18 (M.no.62) は、「悪い主君たち」*mals seignors* (v.26; C: fols s.) から離れていまは幸福である、*benfaitz* [恩恵・恩貸地・ベネフィキウム] も *socors* [援助] も得られないような「主君」と一緒にいるなどは狂気ざたである、という。

この作品は、本稿であつかった作品52とともに、封建制語彙の多いことにおいて双璧である。とくに「愛」が *pretz* や *valors* のある *dompna* のほうへ私を導いてくれて (vv.19-20)、あのようなところから (*de lai*, v.14) 脱出できた自分はいへん嬉しい、不幸な恋愛を恐れる男は狂人である、なぜなら私は「他のところ」*ailhors* (v.23) でなめた辛酸と過ちを見て、いまはどれだけ救われたかがわかったからだ、という。いまわしい過去をふりかえりつつ現在の喜びを歌うモチーフは作品29 (M.no.26) のとくに27-30行で語られる「悪しき体験」に共通する。また私のかつて論じたことがあるジャウフレ・リュデルの作品 (PC 262, 1) にも相通ずるところがあるだろう⁽¹⁸⁾。

しかし、作品52のように過去の女性の不行跡をなじる例は少ない。きわめて特徴的なこの部分を、ムーザの述べるような単なる一挿話としてかたづけることはできない。

西欧の封建制社会では、主君と家臣の関係は一種の契約であり、契約である以上、変更・解除す

ることが可能であった。愛される者と主君との混淆が当時の社会の社会倫理を敷き写しにしたものであり、男性の女性への強い献身が一種の契約関係にもとづいて要求される。身分上、既婚の上位になつた夫人が、その契約を破ったからには、詩人は「主君」を代えて当然なのである。*mala domna* から *bona domna* への宗旨がえである⁽¹⁹⁾。この作品はそれを明瞭に示したものとすることはできないであろうか。封建制にかかわる語彙が融通無碍に用いられたのも、このような背景を踏まえることによって初めて理解できるのである。

bibliographie sommaire

[éditions]

- François Juste-Marie RAYNOUARD, *Choix des poésies originales des troubadours*, Paris, Firman Didot, 1816-1821, t.III, 1818, pp. 292-295.
- Jean MOUZAT, *Les poèmes de Gaucelm Faidit, troubadour du XII^e siècle*, Paris, A.G. Nizet, 1965, (coll. Les Classiques d'Oc), pp.336-344 [c.-r. par J.-H. MARSHALL, in *The Modern Language Review*, t.63, 1968, pp.959-962].
- Robert ARCHER et Isabel DE RIQUER, *Contra las mujeres, poemas medievales de rechazo y vituperio*, Barcelona, Quaderns Crema, 1998, pp. 124-127 (texte: Mouzat).

[études]

- Vincenzo CRESCINI, «Canzone francese d'un trovatore provenzale», in *Atti e Memorie della reale Accademia di scienze, lettere et arti in Padova*, t.26, 1910, pp. 63-105.
- Glynnis M. CROPP, *Le vocabulaire courtois des troubadours de l'époque classique*, Genève, Droz, 1987.
- Friedrich DIEZ, *Leben und Werke der Troubadours*, 1829, pp. 361-378; 2e éd., 1882, pp. 293-307.
- K.-J. HOLLYMAN, *Le développement du vocabulaire féodal en France pendant le haut Moyen Age (étude sémantique)*, Genève, Droz, / Paris, Minard, 1957.
- Alfred JEANROY, *La poésie lyrique des troubadours*, Toulouse, Privat, 1934, 2 vols.
- Jean-Loup LEMAITRE, «Le nécrologe de Solignac et les troubadours limousins, nouvelles mentions de Gaucelm Faidit et de Gausbert de Puycibot», in *Romania*, t.99, 1978, pp.225-229.
- Christiane LEUBE-FEY, *Bild und Funktion der "dompna" in der Lyrik der Trobadors*, Heidelberg, Carl Winter, 1971.
- Walter MELIGA, «Une nouvelle édition du troubadour Gaucelm Faidit», in *Le rayonnement de la civilisation occitane à l'aube d'un nouveau millénaire, 6^e Congrès International de l'AIEO, 12-19 sept. 1999*, Wien, Edition Praesens, 2001, pp. 236-243.
- Robert MEYER, *Das Leben des Trobadors Gaucelm Faidit*, Heidelberg, 1876.
- Jean MOUZAT, «De Ventadorn à Barjols, les troubadours limousins en Provence entre 1150 et 1250», in *Mélanges de philologie romane dédiés à la mémoire de Jean Boutière, (1899-1967)*, Liège, 1971, 2 vols., t.1, pp. 428-432.
- Jean MOUZAT, «Du nouveau sur le troubadour Gaucelm Faidit», in *Actes et mémoire du VI^e congrès international de langue et littérature d'oc*, t.II, 1971, pp. 394-400.
- Adolf TOBLER, «Ein Minnesänger der Provence», in *Neues Schweizerisches Museum*, t.5-1, 1865, pp. 62. sqq. [id., *Vermischte Beiträge, Der Vermischten Beiträge zur Französischen Grammatik, Fünfte Reihe*, Leipzig, S. Hirzel, 1912, pp. 125-159].
- Sergio VATTERONI, «Per lo studio dei Liederbücher trobadorici: I. Peire Cardenal; II. Gaucelm Faidit», in *Cultura*

Neolatina, t.58, 1998, pp. 7-89.

注

- (1) Marc BLOCH, *La société féodale*, Paris, Albin Michel, 1939-1940, 2 vols., t.I, p. 229 [堀込庸三監訳『封建社会』、岩波書店、1995, p.189]; cf. HOLLYMAN, p.165 et p. 28.
- (2) 以下、ガウセルムの作品の指示はPCの番号により、場合によってMを付してムーザの校訂版での作品番号を示す。PL (= Petit Levy) などの略号については、瀬戸『トルバドゥール詞華集』(大学書林、2003)、pp. xix-xxivを参照されたい。
- (3) ガウセルムが、サヴァリック・デ・マウレオン、ウック・デ・ラ・バカラリアと3人で交わしたパルティメンについては瀬戸「愛にかんする三つの命題—中世フランスのジュー・パルティについて—」in *Études Françaises* (早稲田フランス語フランス文学論集)、t.1, 1994, pp. 1-22; Naohiko SETO, «Sur une variante du ms. C dans le *torneyamen* proposé par Savaric de Mauleon», in *Proceedings of the Seventh National Conference on Occitan Language and Literature, 19th-20th April 1994*, Department of French, Royal Holloway, University of London, 1994, pp. 34-46.を参照。これには本稿であつかう作品と同じく、トルナーダで「マリア夫人」(Maria de Ventadorn) への呼びかけがある。
- (4) Diez, Robert Meyer, V. Cresciniらは、第4回十字軍にのみ参加したとみなしていたが、ムーザはサラディン(1138-1193)の存命中でなくてはありえない記述がガウセルムの十字軍歌にあることから、第3回のそれにも加わったに違いないとしている(MOUZAT, 1965, pp. 456-457)。
- (5) 主として以下による: MOUZAT, 1965, pp. 25-41; *id.*, «Du nouveau (...)», 1971; LEMAITRE, 1978, pp. 225-226; *GRLMA*, vol II, t.1, fasc.7, pp. 100-107.
- (6) 1989年にSlatkine社よりリプリント版が出ている。これは608ページまでが1965年の版の復刻であり、残りの100ページあまり(pp. 609-720)は、ムーザの別の3論文を付加したもの(«Du nouveau sur le troubadour limousin Gaucelm Faidit» (1971, pp. 610-616); «Guilhem Peire de Cazals, troubadour du XIII^e siècle, édition critique et traduction» (1954, pp. 617-686); «*Cel de Tintinhac*, introduction à Arnaut de Tintinhac, troubadour limousin» (1956, pp. 687-720)). 65年版への39箇所の*errata*は有益だが、訂正すべき箇所はその何倍もあるだろう。
- (7) 各作品を、作られた年代順に並べる方法の一変種といえる。瀬戸「作家主義か作品主義か—ペイレ・ヴィダルの抒情詩の並べかたについて—」『比較文学年誌』(早稲田大学比較文学研究室), t.43, 2007, pp. 1-15.を参照されたい。
- (8) «(...) les caractères et les défauts des éditions de Mouzat et de Kolsen les rendent inutilisables pour une réédition de l'œuvre de GcFaid et obligent à reprendre du début de travail de collation et de comparaison entre les manuscrits.» (W. MELIGA, 2001, p. 236)。なお、各写本による詩人の作品の収録順序から、オリジナルのテキストにさかのぼろうとするヴァッテロニ氏が、ガウセルムの作品についてもその調査の一端を発表している(S. VATTERONI, 1998, pp. 46-85)。本稿ではこの研究に触れることはできない。
- (9) Ed. BOUTIÈRE-SCHUTZ², 1964, pp. 180-184. EN²PR写本により伝えられている。この*razo* (c)は、別の2作品(PC 167, 43 et 59)の*razo* (b) (éd. BOUTIÈRE-SCHUTZ², pp. 274-279)の冒頭を変えただけで、ほぼ同じ筋書きである(cf. MOUZAT, 1965, p. 342; JEANROY, *La poésie lyrique des troubadours*, 1934, t.I, p.122, n.3)。
- (10) Cf. éd. MOUZAT, p. 454 et p. 458.
- (11) ムーザの«la forfaiture que je ne lui demande pas de baisers ni de coucher (près d'elle)»という解釈では、誓いの内容がvv. 16-20で述べられているガウセルムの自負とのあいだに矛盾が生じてはいないだろうか。
- (12) MOUZAT, 1965, p.157; 瀬戸「ペイレ・ヴィダルのパレスチナの歌—baiser voléのモチーフを中心に—」, in *Études Françaises* (早稲田フランス語フランス文学論集), t.14, 2007, pp. 1-33、とくにp. 24を参照。
- (13) Cf. HOLLYMAN, pp. 120-122; Marc BLOCH, *op. cit.*, t.I, p. 249 [堀込庸三監訳 p. 205]; CROPP, p. 475.
- (14) ここのテキストは、*senhoratge* (CEPR), *seignoratge*, (AKV) *seignorage* (DN), *segnoratge* (G)、

segnorage (R), *senoraie* (T), *seinghoraie* (I), *segnioratge* (a), *seinhorage* (Mf), *signorage* (Q) と綴りはさまざまである。また中世ラテン語における意味については :DU CANGE 7, 421-422; NIERMEYER², pp. 1250-1251 (SENIORATICUS, SENIORATUS, SENIORIA)。cf. FEW 11, 450a: Apr. *senhoratge* „part de lion“ (ca 1200), „prérogative, prépondérance“ (2. Hälfte 12. jh; ca. 1200, KolsenBeitr 178 [=PC 406, 31, v. 29 „Vorrang“])(...) apr. *senhoratge* (1265)(n. 19: Cout. Aurillac 1265, nach einer abschrift von 1517).

- (15) 「若さ」に精神性を認めて肯定的な価値を認めたのは南仏の抒情詩人たちであった。デュビは当時の文学テキストから、「若い」という形容が騎士叙任から結婚するまでの貴族、一家の主人となる前の、あるいは主人になりえない長子以外の男子（宮廷風文学にもっとも親しんだであろう層）に適用されたことを指摘している (Georges DUBY, «Au XII^e siècle: les “jeunes” dans la société aristocratique», in *Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, t.19, 1964, pp. 835-846.
- (16) *chanson de change* については、Erich KÖHLER の未完の遺稿: «„Vers“ und „Kanzone“, in *GRLMA*, volume II, t.1, fascicule 3 (Heidelberg, Carl Winter, 1987), pp. 45-176 中の、第5章の4: Abschiedslied (別れの歌) を論じた部分 (とくに p. 103, と p. 171) ならびに Ch. LEUBE-FEY, *Bild und Funktion*, pp. 74-84; R. ARCHER et Isabel DE RIQUER, *Contna las mujeres*, pp. 25-28. が詳しい。
- (17) MOUZAT, 1965, p. 342.
- (18) 「ジャウフレ・リュデルの「災厄の記」—第4歌の一解釈」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』t. 43-2, 1998, pp. 25-44; Naohiko SETO, «*Historia calamitatum* de Jaufre Rudel», in *La France Latine*, t. 129, 1999, pp. 211-234.
- (19) Cf. Ch. LEUBE-FEY, p. 100.